



長良抄
三五記抄
全

伊地知文庫
文庫20
197



長良抄
長短抄

小字長良三卷目録
上ノ巻目録



伊地知氏書冊

長良抄

闇夜一燈



又連歌の形一は月の昔と思ひ并宮に
 い舟一は暮少を路路の明さいと形一
 今心の交りすも舟人の心は形り色も梅を
 折こなるさやのこ舟一は梅の舟もあ
 好中もさしと先長秋の舟よあ路をばあ
 そまの舟よハ星の舟のおのつらうは
 中舟よ一氷舟の舟よふらさよ船中を
 舟よ山家の舟よと氣色毎舟よ今味一舟
 舟よ舟よ不遠玄玄の舟よ入舟一舟

一消返

露霜雪雲

灯命

一山や

月日澄

霜風

一強返

月日露雪

高去種雲

一欠云

車月日

時返

一牛山

鳥声雁雲

秋月日秋

一才

月日澄郭云

床の音

一足

花月音

才

一酒返

月日澄

厚

一山む

月日思恨

一重返

山雲衣

一亭

花世旅去秋

一亭

此月思髮

一亭

蝶鳥世雲

一亭

水子月花鳥

一亭

雲洞和鏡
鳥花世雲

一亭

月花露夏

一亭

日洞水

雲夏時白露

一亭

雲在

郭云鳥麻

一亭

瑞風水舟

松風秋海

一亭

水波

月花時鳥

去秋

一過留

時雨自内来

一火

黄心子母

衣干

くひ火

水煙

いさく火

きしきん

一松升煙

物ふこのころ

月影鴨居

一挿ぬ

高木相

一しほしき

娘在花地友

一しうあき

霧の夜命

在牙

露の花首

一帆なる

在

命松有明

一眺向

一返ん

雲香山月

身

一 移

嘉酒厚

一 眼

虫さうりく

一 髪

世身
花山霧の風

一 好

草の志鳥
水山亭寂音

一 海

水山川
松の好音

一 出

野山船月日

一 海

月雪花雲

一 丘

水山月世庵

一 海

水小蝶雲月

一 井

衣碓浪

長秋船

一 巾

香雲樓
竹葉鳥

一 端

鳥居
去秋雲

一 子

舟
月泉郭云

一 事

秋鳥
歎
系

一 記

野分
夏康

一 道

康水
野山
系

一 明

月
斬齡

一 友

月
花居
旅鳥

一 切

雲
水鳥
神

一 切

松
木
船
橋
雲
神

一延命

延命心

一法外

法外馬心

一折

花より書本
紫華也花

一書

内蔵の書
琴

一吹

笛吹の心

一灯

灯法心

一燈火

里舟の心

一法心

法心の月姫心

一如心

如心
如心

一如水

如水
如水

一 おまじ

世蘇神身

一 色々

露衣扇身

一 色々

姉妹

一 色々

黄柳柳

一 色々

柴扇

鳥さす也雲風
襦

一 色々

麓行々系

一 色々

野山

日命子の綴子

一 色々

衣襦

長命の原

一 色々

地巾紐髪

一 色々

巾紐の氷

一 牛

道命格身

一 果

去好命身

一 好

除竹系身

一 日

每日新笠沙

棹店

一 心

去秋梅香

心身

一 如

野山水箱

只の音

右 岩向目他准

長經抄

史之十一字と長經抄と懐との懐とを
去る史と業平作時因持の傳と父の時常
野邊より流しりて盃とを侍り
佐いしらの雲れと一たひ侍より
今よとまてぬ士の心おれ一とやんり
思ふ心あり可一とまはまぬとありつるハ書
一室よ祇と住吉のちけの玉匠のいり
ちややふるとふれと一と成事と一とを
七句れと解及ぬととる卒の花の影

傳抱して春秋の職はるを悟る遠慮の
月のりよ今家一は穠之の用をと思へ
く雅之の身とくさくさ一左室とくさくさ
眼よあはれさるる成ふよ身とくさくさ
韻の梅くくさくさくさくさくさくさ
すへ侍くくさくさくさくさくさくさ
とわらばくさくさくさくさくさくさ
記よ十神奥方御座りく今管とくさくさ
はえとくさくさくさくさくさくさ
るくくさくさくさくさくさくさ

くさくさくさくさ

才一幽玄程

行行雲迴雪

洞よりこれいづれ松の月

これ流の長る所を流る

行雲神

有る物志を返し

今さしりしんはるる

月をいづれはるるの山を

廻雲神

余れある物よ心と返る行

形見なるるすはるる

まきとともはるる山を

才二長高程 行行山を白流梅

くはるるの山を

まきとともはるる山を

高山程

途は海を

その方れはるるの山を

まきとともはるる山を

色白神

行事ととも

月をいづれはるる

廣はるる海を

澄海程 心と澄し目と

行行はるる

思ふにゆく月の終なる月とて

中三有心裡 付表神 不明神

物表神

定と思せる月の音く

惚れぬとを徳よすは

不明神

さよよける身とて

むのひさし

中三有心裡

惚れぬとを徳よすは

中三有心裡 付表神 不明神

三柱体

中三有心裡 付表神 不明神

惚れぬとを徳よすは

うに花を花り上の花

中五更とて神

草の居を

思ふにゆく月の終なる月とて

中六面白神

惚れぬとを徳よすは

花の時を花り上の花

中七濃神

惚れぬとを徳よすは

あく神もうに花を花り上の花

三柱体

中五更とて神

草の居を

思ふにゆく月の終なる月とて

中六面白神

惚れぬとを徳よすは

花の時を花り上の花

中七濃神

惚れぬとを徳よすは

あく神もうに花を花り上の花

春の野はいつこの部れ家まじり
右りのつらねまもと指ささるる
まゝくてもぬる

一巾白れてるう之は又大座と押くる
ぬ

野の枝り花を折る
まよふあられる月をわらわ
奥ろくても有は侍師は也

一二一れ度

是ーー づーー ぶーー さいまの
山さー 暮さー 月さー さいまの
まーー ぬさー 暮さー さいまの

一乃西れ事

ふ 編りのまをたののさあ
く 草のまをたののさあ
ま 舟も所とあまらるる
つ まと切のまをたののさあ

一 ぼろい交白紙を押しもろろ
あぶら 押字の白紙
ちり 口内を

一 ぼろい けりやういへとあぶら

一 ぼろい 月もあぶら

一 ぼろい 突入しあぶら

一 ぼろい 五輪あぶら 野山

一 ぼろい はしとらあぶら

一 ぼろい 雁のあぶら

一 ぼろい けりやういへとあぶら
一 ぼろい 月もあぶら
一 ぼろい 突入しあぶら
一 ぼろい 五輪あぶら 野山
一 ぼろい はしとらあぶら
一 ぼろい 雁のあぶら

一 皮肉骨と連歌

皮 けりやういへとあぶら

肉 けりやういへとあぶら

骨 けりやういへとあぶら

一 ぼろい けりやういへとあぶら
一 ぼろい 月もあぶら
一 ぼろい 突入しあぶら
一 ぼろい 五輪あぶら 野山
一 ぼろい はしとらあぶら
一 ぼろい 雁のあぶら

と黄門ふさふさのねを送つて弁願御も
高の山味を尋ねておぼれおぼれと
浮松のりひひりひりひりひりひりひり
ちを今来るよは後一ひり。

中一風

ふさふさの目よの原を
色山と思ふはなほまはるか
本のやを産のよまもねる

中二賦

水暗く山影のあはれ
とられうととれうととれうととれうと

中三比

物よあはれとあはれと
色山を初の下なる産物
影をとせんのかのやまへ

中四具

物よあはれと具よあはれと

川音を指よくしむる山形
雁のうぐさの夕種もね

中五雅

中五雅 中五雅 中五雅

梅の香よつねにわらわの心
何とぞくし山を産香くん産

中六頌

中六頌 中六頌 中六頌

津のゆる指々代このおさく
照一や一や一や一や一や一や

一切字之事

花打今よる花の山語形

もる 村を産山なる声もね

り 移りけりたる曲のまの音

事子 まくろくを流音移るまの庭

じ しろくしむ花のよるまの庭

夜 名をよま月やうくとおつる

一 新衣し桐の葉をうくとおつる

も 和衣の庭をふのらくとおつる

そ 白を花をねむひくとおつる

一 三修切之巻の 在り侍

花の細柳と髪ととよははれ
其月而をこのまはるの
古三修切巻の事と侍の事と

一 五巻の 侍の

花の巻の事と侍の事と
古巻の
おまの事と物とおまの
おまの事とおまの事と

花の名巻の巻の事と侍の事と
侍の侍の事と

一 七巻の 侍の

花の巻の事と侍の事と
侍の侍の事と
おまの事とおまの事と

一 八巻の 侍の

花の巻の事と侍の事と

竹の如く大田の下の如くは海傍の中今如くは
卯の如くも志をなすもの如くは

そをいふものも如くは

神の如くは——印物 此道

一 二つ也連音 此道中

先之為の如くは此れ月を去る人又如くは
よそ神の如くは中から又如くは如くは
眼中にのみ得たりし如くは

一 連歌の如くは世間此の如くは若くは
流るる如くは八切注水は静かたりし如くは

ては如くは去る人如くは如くは

一 夢想の連歌如くは月の中之如くは

は如くは如くは

世間の如くは如くは如くは如くは
一字如くは如くは如くは如くは
字をて如くは如くは如くは

は如くは如くは

一 如くは如くは如くは

源頂 離送

源とハ 世の中

享保十五戌秋八月十九日寫於
浪華令書寫之者也

鳩信

安永七年冬十月廿五日奉
請許借書寫之焉

歸耕

此書推門之用申由白飛申候

